

Title	論理学・数学の哲学セミナー(2011年12月19日 三田キャンパス南校舎7階474教室)
Sub Title	
Author	秋吉, 亮太(Akiyoshi, Ryota)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2012
Jtitle	Newsletter Vol.18, (2012. 3) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000018-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Kant's Transcendental Idealism in Focus Part IV

Jens Timmermann博士講演会

“Kantian Dilemmas? Moral Conflict in Kantian Ethics”

(2011年11月10日 三田キャンパス東館6F G-SEC Lab)

2011年11月10日に、セント・アンドルーズ大学Jens Timmermann博士の講演会“Kantian Dilemmas? Moral Conflict in Kantian Ethics”が開かれた。本講演は、2009年から本拠点にて開催してきた連続講義シリーズ“Kant's Transcendental Idealism in Focus”の最後を飾るものであり、また、本シリーズでは初めてカント倫理学をテーマとするものであった。博士は、西洋倫理学の古典として広く読まれている「道徳形而上学原論」の詳細なコメンタリーを始め、その堅実かつ鋭利なテキスト読解において国際的に高い評価を受けているカント研究者である。

今回の講演は、タイトルからも窺えるように、カント倫理学における道徳的対立の問題の扱いを主題とするものであった。一般にカント倫理学は、「嘘をついてはならない」というような道徳上の義務を例外なく課すものであり、そのため道徳的義務のあいだの対立は許容しない立場であると考えられがちである。これに対して博士は、カントが義務そのものと義務の根拠を区別していることに着目すれば、カント倫理学において、義務そのものの対立は概念的に不可能だとしても、義務の根拠のレベルで道徳的対立が可能であることが明確になると論じられた。もちろん、この議論によっても、カントが道徳的対立を詳細に検討しなかったという事実が消えるわけではない。博士は、この事実はカントが道徳的対立に哲学の限界を見ていたことの反映であり、道徳的対立をめぐるカントの叙述は、徳ある人間の正しい判断に対する彼の信頼を示すものであると主張された。

講演は博士らしく、カント解釈上の複数の問題に深く立ち入って検討するものであった。それだけにカントの専門家でなければ問題の所在がつかみにくいのではないかと心配もあったが、当日はカント研究者以外の参加者からも多くの質問の手があがった。講演後は、こうした雰囲気も本連続講演シリーズの成果のひとつと言えるのではないかと考えを改めた次第である。

(村井忠康)

Dr Jens Timmerman (University of St Andrews, UK) gave a lecture as part of the lecture series “Kant's Transcendental Idealism in Focus”. The topic was Kant's treatment of moral conflicts. Dr Timmermann argued that contrary to the common image of Kantian ethics, Kant makes room for certain kinds of them.



論理学・数学の哲学セミナー The Philosophy of Logic and Mathematics Seminar

(2011年12月19日 三田キャンパス南校舎7階474教室)

2011年12月19日に、京都大学文学研究科博士課程の伊藤遼さんと、関西大学社会学部の大西琢朗さんを招いて、論理学・数学の哲学に関するセミナーを開催した。

伊藤さんは、イギリスの論理学者・数学者・哲学者であり、有名なパラドクスの名前にもなっているB・ラッセルの言語観に関して講演された。ラッセルは、彼の名前を冠したパラドクスの解決を、有名な『プリンキピア・マテマティカ』において提示したが、その前に書かれた『数学の諸原理』から、その言語観や言語に対する哲学的態度に関して、様々な変化をとげたことが知られている。講演の趣旨は、その変化の根底にある思想的バックグラウンドを探るというものであった。

大西さんは、論理哲学において、論理的なことばの意味（たとえば「かつ」「ならば」の意味を、証明という実践から与える証明論の意味論について講演された。従来の証明論の意味論は、「主張」という概念をキーにして構成されてきたが、近年、「主張」と「拒絶」という二つの概念をもちいる新たな試みが提案されてきた。講演の趣旨は、従来の証明論の意味論ではとらえきれなかった、「主張」と「拒絶」の双対性を、この新たな証明論の意味論の枠組みから検討し直す、というものであった。

講演会当日は、学外からも積極的に先生方、学生の方々にご参

加いただき、二時から七時過ぎまで、長時間にわたり活発な議論が行われた。さらに哲学、論理学、数学などバックグラウンドの異なる方々の間で活発な議論が行われてことを記しておきたい。

(秋吉亮太)

The Philosophy of Logic and Mathematics Seminar was held on 19th December, 2011. Dr. Ito gave his talk on the transition of Bertrand Russell's philosophy of language between “The Principles of Mathematics” and “Principia Mathematica.” Dr. Ohnishi gave his talk on the duality of assertion and refusal from the viewpoint of the bilateralism in proof-theoretic semantics.

